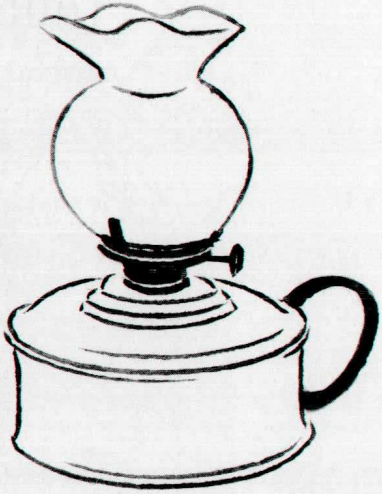
剛

めらめら炎

—木戸孝允

下巻



中央公論社

醒めた炎—木戸孝允　下巻

定価二七〇〇円

昭和六十二年八月二十五日初版

昭和六十二年十月　五　日再版

著　者　村松　剛

発行者　嶋中鵬二

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋二丁目八番七号

郵便番号一〇四　振替東京二一三四

©一九八七　検印廃止

ISBN4-12-001598-X

醒めた炎―木戸孝允　下巻

目次

薩長連合 3
四境戦争 43
将軍慶喜 82
大政奉還 126
王政復古 169
狂瀾 215
神戸事件 254
御誓文 279
東京 308
「会津猪、米沢狸」 354
版籍奉還 382

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

兵制一条 411
諸隊叛乱 457
民部省 492
廃藩置県 524
遣外使節団 553
留守政府 602
大分裂 638
「新政府」 681
台湾出兵 710
左大臣の策謀 738
白雲を望む 768
あとがき 803
外国語参考文献 809

上巻　目次

癸丑の年　航海遠略策
「黄金郷」日本　久光東上
処女国家　君臣湊川
邪宗門　将軍上洛
水戸学　三本木
兵術家　政変
老公ご謀叛　潜伏
大獄　蛤御門
武蔵の野辺　出石
丙辰丸　藩制改革

醒めた炎 —木戸孝允 下巻

薩長連合

海の風が、冷い。

裾をおさえながら、幾松は小五郎のうしろを歩いた。行くさきは馬関新地の、林八郎左衞門の店である。

馬関新地は萩藩の直轄領であり、林八郎左衞門は古くから薩摩との煙草の取引にあたっていた。当日あつまったのは高杉晉作、井上聞多とその妻おしげ、伊藤俊輔とその妾、土佐藩の男ひとり、と記録されている（「中野半左衞門日記」十月十四日）。

土佐藩の男が坂本龍馬をさすことは、ほぼ疑いをいれない。龍馬は十月七日ころ、山口から馬関に出た。

井上聞多の妻おしげと文中にあるのはおしづ（志津）のたぶん誤りで、彼女は線香場（検番）の抱え藝者だった。藝名は、力松という。

はじめは眞木和泉守の四男菊四郎の愛人だったのだが、菊四郎が下関で土佐の脱藩士らしい三

人に斬殺されたあと、聞多が彼女を落籍させてつれて歩いていた。菊四郎の暗殺は、薩長連合の必要を彼が説いたことに起因するらしい。

聞多が力松を溺愛し伊藤俊輔がお梅に夢中になっているのを高杉晋作がからかって、「世兄松樹を愛し、春兄梅花を愛す」という献辞つきの詩を書いている。聞多は世外と号し、俊輔は春畝といっていた。

松梅徳を争ふ満庭のうち
好しこれ謫人の安樂場

力松を聞多は「流謫」の地の別府にまで、つれて行ったのである。俊輔のお梅の方は稲荷町のいろは楼に身売りして小梅の名で藝ごとを仕込まれているのを、俊輔が身請けした。

あいだに立ったのは東南部町の物品問屋、中津屋多助（二代目）の息子の松次郎だった。中津屋は元来が昆布問屋であり、――山口の郷土史家、中尾定市氏の調査によると――自前の九反帆船までもっていた。

北海道の海産物の需要は大きく、中津屋は長崎の商館にも商品をはこんだ（長崎からシナ大陸への輸出品は、おもに鮑だったと推定される）。

幕府が箱館を開港して外国船が直接に北海道貿易をはじめたために、北前船を介しての商売は打撃をうける。それが理由だったとは簡単にはいえないにせよ、この店は討幕の志士たちに好意的だった。

お梅の落籍にはいろは楼の方が条件をつけ、

――伊藤さまの本妻にされるのなら、そのような支度もしてさし上げましょう。

妾にするつもりならことわる、という口上だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

お梅は下関の商人店屋久兵衛の娘だが、久兵衛もその妻も安政年間に死に、十八歳のお梅には身寄りがない。孤独な小娘の境遇に、いろは楼では同情したのだろう。

俊輔には、すでに妻がいた。入江九一と野村靖之助との妹すみ子を文久三年の三月に、彼の両親が息子の嫁として迎えていたのである。

このころ俊輔自身は、小五郎の従者として京都にいた。当人がいないあいだに両親が嫁を迎えておくことを「御待受」といい、幕藩時代の長州ではしばしば行なわれた。

入江の家は足軽だから、家格も似通っている。俊輔はこの結婚に不満だったわけではなく、承諾の手紙を両親宛に送っていた。

「先日の御手紙に入江九一妹お墨、私妻として御もらひあらされ候段仰せこされ、つぶさに承知奉候。」（文久三年三月二十一日付）

俊輔は京都からそのまま横浜に出てロンドンに渡航し、帰国後は下関に潜居して国事に奔走していたから、新妻とはわずかに一夜をともにしただけだった。それでも妻は妻であって、お梅を正妻とするためには同志のこの妹と離別する必要がある。

離婚は慶應二年の三月に、正式に成立する。すみ子は俊輔の祖母と両親とに別れのことばを述べ、仏壇のまえに坐って祖先の位牌に手をあわせたのち、鄭重に一同に挨拶して実家にもどって行ったという。

俊輔の方に結婚の準備がととのうまで、お梅は中津屋の離れに預けられた。読み書きもできないお梅は馬関の海のよく見える部屋で、文字の手習いをはじめた。

自分の夫になる男がわずか二十年足らずのうちに位人臣をきわめようとは、顔の長いこの娘にはむろん想像もできない。後年の伊藤博文夫人梅子は自分の生立ちについて、一切語ろうとしな

かった。

梅子の出生について聞かれるのをきらった点では、伊藤も同じである。戸籍調べの巡査が伊藤邸をたずね、おかみさんの俗姓をお教えいただきたいというと、伊藤が出て来て、

――伊藤博文の妻にまちがいない。そんなにくわしく聞かんでもよい。

参議がそういいはるので巡査が閉口したと、大警視の川路利良が大久保利通に報告している。

坂本龍馬をかこんでの宴席に伊藤が同伴した「妾」とはお梅のことだろうし、中津屋の離れにすでに移っていた彼女をこの日はつれ出したのであろう。夫人や愛人を各人が同伴しての集会は、この時代としては珍しい。

藝妓を呼ぶとはなしの内容が洩れる怖れがあるので、座間のとりもちは愛人たちにさせたのではないかと思われる。費用は、小五郎が支払った。

幕府の長州征討を制止するために薩摩が藩兵を出すから、その糧米を補給してほしいと龍馬は西郷の意を体して山口で政庁の役人たちに説いた。薩摩は「兵力をもって（幕府を）再度押止めたくとの策の由」と、山田宇右衛門は小五郎宛の手紙に書いている。

龍馬の説明は、実情とは少しちがう。西郷は薩摩の藩兵の京都派遣を、長州征伐をやめさせるために企てたわけではない。

英仏蘭米四箇国による開港の勅許要求にたいして、西郷吉之助は諸侯会議の開催を主張していた。大久保一藏は福井松平藩への使者として北陸に向かい、西郷自身は島津久光の出馬を仰ぎに帰国した。

久光を擁して、藩兵は京都に出る予定だったのである。しかしそれも長州藩のためだといった方が、長州の反薩摩感情はやわらぐ。

山口の藩庁は事実龍馬のはなしを聞いてよろこび、米の調達を小五郎に命じて来た。

開港と貿易とを求める西洋諸国の慾望の兇暴さは、この時代の清、朝鮮を含む東洋人にとって、想像をこえるものだった。

交易を行なうか否かは、それぞれの国の勝手であろう。それを艦隊を派遣して来て、要求に応じなければ砲火に訴えると威嚇する。

清国も日本も、何が起こったのかを十分には理解していなかった。西洋諸国の貿易への情熱はヨオロッパの土地の貧しさに由来していると、日本に外交官として長く勤務したサー・ジョージ・サンソムが、その著書『西欧世界と日本』の冒頭近くで述べている。

サンソムのこの指摘は、正確だろうと思う。古代エーゲ海の島島の住民もギリシャの都市国家群も、交易なしには生活の維持が困難だった。

ローマ帝国が北アフリカに小麦を依存していたことは、ひろく知られている。ローマは小麦を北アフリカからはこび、肉料理には欠かせない香辛料を中東、インドから輸入し、葡萄酒はフランスでつくり、さらに絹を漢帝国から輸入して市民の生活を維持していたのである。

サラセン帝国が勃興して北アフリカを支配し、地中海の制海権を奪ったことが、ヨオロッパ社会を窮乏に追いこむ。北アフリカという穀倉を失っただけではなく、ヨオロッパはその中心を地中海の沿岸からパリ、ロンドンなどの北部に、移さざるを得なくなった。

パリは北緯四九度だから樺太のほぼ中央部にあたり、ロンドンは北緯五一度線の北に位置する。農耕に適した土地とはいえない。

十世紀以前のヨオロッパは暗黒時代であり、人間どうし喰合ったという凄惨な記録さえある。

それでもフランスは比較的肥沃で、十一世紀に農耕技術が改良され治水工事がすすむとともに人口も増し、十四世紀には人口推定千三百万を算するにいたった。

同時代（室町期）の日本の人口が、これと同じくらいだったと思われる。国土面積がフランスの約三分の二――北海道を除けば半分程度――しかなく、しかも国土の五分の四が山地であるこの列島に、当時ヨオロッパで最大の人口をもっていたフランスとほぼ同数の人間が棲息できたのである。

日本の農業生産性が、いかに高かったかが知られる。日本はまさに、「瑞穂の国」だった。

大英帝国をつくったのは、じゃが芋であるという説がある。馬鈴薯はドイツ料理でも大きな比重を占めるが、その原産地は南米であって十六世紀までは輸入されていない。

貧しいヨオロッパは貿易にたよって生きるほかなく、その生活条件が数数の勇敢な冒険的商人たちを生み出した。ポルトガルの大航海者たちがブラジルやモザンビークやアンゴラを植民地化してとおい日本にまで来たとき、本国ポルトガルの人口は百五十万人にすぎなかった。

同じ時代のイギリスの人口は、五百万人である。日本にも冒険的な商人たちはいたし、明の商人や海賊は一時期ペルシヤ湾からアフリカのソマリにまで行ったけれど、彼らを庇護する気持が政府にはとぼしく、その活躍は長つづきしなかった。

ローマ帝国が漢やインドから生活上の必需品を購入したのにたいして、漢が輸入したのは駝鳥の卵や象牙や「赤い汗をかく馬」や寝室用の白い美女たちや、つまりそれがなくても格別不自由のないものばかりだったとサンソムは書いている。類似のことは、日本とポルトガルやオランダとの貿易の場合にもいえるだろう。

江戸初期の日本は『オランダ商館長日記』で見るとオランダから羅紗や綸子や玻璃（ビード

ロ）のたぐいを、法外な値段で購入していた。羅紗の一反が、金二両から三両だった。

アジア大陸の東半分は貿易にたよらなくても生きて行けるいわば充足された農業社会を構成していて、だからこそ日本だけではなく清も朝鮮も鎖国に近い政策をとりつづけた。日本の場合は可住地面積にたいする人口密度が、室町のころから世界でたぶんもっとも濃密な国だった。

幕末の外交関係をふりかえると、貿易についての東西の伝統的体質的な感覚のちがいを考えざるを得ない。開港を求めて恫喝外交を行なったペリイにせよ、艦隊をひきいて大坂湾に乗込んだパークスにせよ、自分たちの所業の乱暴さ、理不尽さにたいする認識は、かけらほどももっていないのである。

それでもペリイには、アメリカの捕鯨漁民の保護という一応の人道的「大義」があった。パークスの目的は、単に通商の安定化と拡大とにある。

彼は条約の朝廷による批准のほかに兵庫、大坂二港の開港を求め、幕府が朝廷から容易に承諾をもらえないと知ると、

――タイクンとはそんな程度のものか。

代表の若年寄、立花種恭に向かって、吐いて棄てるようにいった。立花は一瞬、その場でパークスを斬って自刃しようかと思った。

朝廷が通商を嫌うからといって、大公儀が異人から侮辱をうけるいわれはない。パークスの方は単に「商人」代表として感じたことを口にしたまでで、将軍がこれほど無力であるとは実は彼は知らなかった。

軍を大坂城まで進めた将軍が、京都の朝廷を説得できないでいる。いまは将軍を交渉相手の位置から「完全に放り出すべきだという考えがわれわれのあいだに起こった」と、アーネスト・サ

トウはその回想録でいう。

日本の最高の権威が天皇であるのなら、交易のためには天皇と直接の交渉にはいるべきである。「しかしミカドの意志に反して（中略）京都まで攻めて行くのには、連合国の艦隊には十分な兵力がなく、かりに兵力があったとしても本国からサー・ハリイ（パークス）に来ている訓令は、そのような行動に出ることを許してはいないだろう。」（サトウ『日本における一外交官』）

連合国は戦争をする気でいると、日本がわでは判断していた。坂本龍馬が小五郎たちに報告したのは、畿内のそういう状況だった。

坂本龍馬はどの写真で見ても、目を細めてうつっている。

龍馬は近視だったとする説が古くからあり、写真を眺めているとこの説は正しいのではないかという気がする。

服装にはおよそ無頓着な男で、若いころは姉の乙女の浴衣をまちがえて着て、そのまま外出したこともあった。こういう癖は後年になっても変らなかったと妻のお龍は語っているのだが、ただしこれについてはまったく逆の証言もある。

伏見の舟宿寺田屋の娘、殿井力女の回想では、龍馬は「大の洒落者」だったという。

――袴はいつも仙台平、絹の衣類に黒羽二重の羽織、たまには玉虫の袴などを穿いて、おそろしくニヤケタ風をされていました。

中岡慎太郎が「坂本は何であんなにめかすのか」と、よくいっていたそうである。政治的な交渉の場に出るときには、素浪人として軽んじられることをおそれ、意識的に美服をまとったのかも知れない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c